

岩手）岩手の伝統工芸「紫根染め」めぐる小説、出版

渡辺朔 2017年6月7日03時00分



著者の中川なをみさん。後ろには紫根染めの着物が並ぶ
=東京都新宿区



本児童文学者協会賞を受賞。自らの故郷を舞台にするなど、本作を「作家人生の集大成」と位置づける。

20年ほど前、大阪の百貨店で展示していた一反の着物に中川さんはひきつけられた。草紫堂（盛岡市紺屋町）が作った紫根染めだった。「澄んでいるのに深い、引き込まれるような紫の色合い。うつとりした」。数十万円する着物を迷わず買った。

児童書を中心に執筆活動を続けながら、大好きな紫根染めをめぐる小説を書きたいと思い続けていた。草紫堂に何度も足を運んだ。目にしたのは、湯気の立つなか、土間で黙々と染料を作る堂主藤田繁樹さん（52）ら職人たちの姿だった。「信じられないくらいの手間と労力がかけられている。思いがなければとてもできない」と中川さん。取材を重ね、7章からなる本作を書き上げた。「一目ぼれした紫根染めの魅力を伝えたかった」と話す。

藤田さんは「模様を作るために職人が針と糸で布を絞る作業だけでも1日8時間で3カ月以上かかる。紫根染めが世界の人々に愛されるというストーリーは作り手としてうれしい」と声を弾ませる。

紫根染めは国内外で高い評価を得る一方、今は作り手が少なくなり、顧客の高齢化も進んでいるという。中川さんは「紫根染めが持つ普遍的な価値と、職人たちが着物作りにかける情熱を知ってもらえば。岩手の人にこそ読んでほしい」と話す。

本作は1600円（税別）。草紫堂やもりおか歴史文化館、県内の書店などで購入できる。問い合わせは学校法人文化学園文化出版局（03・3299・2540）へ。（渡辺朔）



〈紫根染め〉 多年草のムラサキの根（紫根）から採った染料を使う。職人が糸で細かく絞るように縫い上げた絹や木綿の生地を、臼ですりつぶして熱湯で抽出濾過（ろか）した染料に漬けて作る。岩手では江戸時代、紫根は南部藩の特産品だった。明治以降は化学染料の影響で衰退。ムラサキは現在、絶滅危惧種に指定されている。